

絶望した世界で

らふ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現実世界に絶望した八幡はs a oで……

目次

望む道は	1
絶望の先	5
第1節 価値観の違い	10
ツールバーナ第一層攻略だど?!	14

望む道は

高校2年修学旅行に来ている。

そして、昨日奉仕部で依頼を受け遂行中である。

依頼内容は”戸部の告白のサポート”というもの。

但し、1人解せない行動をしているものがある。

葉山隼人―いつも絵に描いたような笑顔を浮かべて仮面をつけている。雪ノ下さんといいい勝負だろう。仮面をとった本当の姿を見てみたいものだ。

まあなんか怖いからいいけど。

(戸部の告白かあゝ失敗するんだろうなあ。失敗することを確定として、じゃあなんで葉山は中立であるような立ち位置にいるのか？そういうえば海老名さんがあのあと以来に来たな男子の仲を保つようにという依頼。でも今見たところでは男子の仲は程よく保っているはず。もし、元々別の依頼を頼んだのだとしたら？それは”グループの維持”だとする。だとしたら、それは戸部の告白を未然に防いで欲しいという依頼となる。”それ”を遂行してしまうと俺の思いはどうなるのか？もしあいつなら許してくれるだろうか。もしなんて考えるだけ無駄か。もし俺なら、もしあいつならなんて幻想でしかない確定事項でない限り推察の域を出ない。これが終わっ「ちよ、聞いてんのヒキオ！」

八幡「うわっ、なんだよあーしさん」

優美子「あーしさんじゃないし」

八幡「なんだよ三浦。俺今考え事してんだけど」

優美子「余計なことしないでよ!!」

八幡「あ?」

いやいきなり言われても。まあ何のことかは大体検討がつくけど、どうせ今俺が読んでいる本のことだろ。残念(・。・。／)ファツシヨ「違うし」えちよ心読むのやめてくんない。怖い、怖い。てかこんなの着る人いんの？これとか、ぷぷっ……くっ……

「ちゃんと聞いて」

八幡「うわっ……」ガサツ

……タレント雑誌だ……誰だよファッション雑誌とか言った奴。割とガチで着ようかと思っちゃったじゃん。

八幡「／／／／」

優美子「~~~~~から、嫌いなんだと思うさ。ねえ、ちゃんと聞いている??」

八幡「／／／／」「ねえっ!!」

うおっ、びくったあー

いきなり高い声上げんなよ。心臓に悪い。てか、俺我に帰るまで結構時間たった? って3分じゃん。恥ずかしさのあまり3分も気を失っていたのか、いやー失敬失敬、剣呑剣呑、ここが戦場ならきさましんでるぞ、とかいう声が聞こえてきそうだが。

「さわかったよ、余計な行動は極力控える」

「極力じゃなくてしないで」

「おーけー」

結論は出た。

俺は遂行するしかないだろう。

それが俺の答え、俺のやり方、あいつらなら、唯一理解してくれたあいつ達なら、きつと認めてくれる——俺の求めていた答えはあの場所にあるのだから——

その後葉山から色々言われて今に至る。

戸部の告白のサポート

葉山グループの維持

これを達成するためには嘘告白しかない。

あいつらなら、俺の行動を理解してくれたあいつらならわかってく

言ってたら始まったちゃうよ。」

戯言を吐き捨てながらも、颯爽と準備しそれでいて強い意志を持ち、何か目標があるかに思われた。

そう、兄の写真を舐めるように見ながら、

「お兄ちゃん。小町はお兄ちゃんのこと大好きだし、それはこれからも変わらない。だから、いつまでもどこでも一緒だよ。勝手にはなれないですよ。あつ今の小町的にポイント高い!!」

妖艶な笑みを浮かべ、八幡とは別の意味で期待を膨らませながら起動発声する。

「りんくすたーとっ」

………
言葉の意味は理解しているはずだ。多分。

絶望の先

「やっと戻ってきたこの世界に」

「んっ?!」

「誰?!」

「キリトか（ハチさんですか）」

八幡「キリトかよてか息びったりだったな」がしがし

キリト「そうですね。ちよつと嬉しくて」くるくる

ハチ「ああ俺もだ」

それから、キリトとは暫くの間話した。内容はβ版との変更点などはあるのか、あるとしたらどこか、将又全て同じなのか。これに限らず、この世界への希望なども話した。話をしている内にキリトとはなんだかウマがあう感じがしたのは気のせいではないはずだ。多分知らんけど。

「……ちゃん達」

キリトとは同じぼっちの匂いというかぼっち特有の雰囲気みたいなものを感じたのだが、話してみるとなんとということもない、ただの女子だった。

いや、だが、反応がいちいちあざといそう、例えば城廻先輩と一色を足したようなポワポワした守ってあげたくなるような雰囲気と相反する積極的な態度そして反応がいちいち可愛い。すぐさま告って振られるまでである」

「……もうっ、馬鹿あ／＼」プシューー

「あれっ、………もしかして………声に出てた?」

あわあわ

「コクコク」

「すまん」ガシガシ

「全然いいよ、その代わり……して／＼」

「ん? すまん聞き取れなかった。もういっく「あんさんらむししとんとちやうぞ」あ?」

「すまん、ワイハ」キバオウ” ってもんだアンさんらβテスターだろ、

もしよかつたらレクチャー頼めへんか?」

「いいですよ。ハチもいいよね!」

「ああ、俺も構わん」

「ありがとう」

「じゃ、早速狩りにいくか。」

如何にも弱そうな猪(ふ……ふ……クレイジーボア?とかいうらしい)それにしても関西弁の子の青年、絶対リアルでは自己中心的思想で色々周囲が掻き乱されてそうだな、可哀想つ。まあ、知らんけど、デレデレしすぎだろこいつ反応から見ても多分40代後半だと思うがキリトに手を出したら潰す、俺が徹底的に潰してやるよ。クククつ。ククク。ククク「ストップ!!」

「キリト?どうしたそんな慌てて」

何かあつたのか、周囲では不自然な事、事象は起きてないはずだが?あれつ。

「殺気!さつきが出てるよハチ。怖い、怖いからやめて!デスノート的主人公みたいなオーラ出てるよ。」

「んん?あれか?削除、削除削除削除削除削除削除削除削除してかやらねえよ」

「いやどっこいどっこいだよ」

「新世界の神になるとか言つてそんな雰囲気かでてるよ?なるのなっちやうの厨二病患者に」

「ならねえよ?!どんな奴だと思ってるんだ?」

「んー厨二拗らせてる人?計画通りとか部屋で言つてそう」

「んんんつ、そ、そんなこと、いつてませえんよ」

やべっ噛んだ。これ絶対言つてると思われてる。やばいやばい話そらさなければ、痛い奴で終わっちまう。

「それよりなんだ、結構上達したじゃねえかきばおうさん」

「おうよ、なんだつたら一人でボス勝てるで」

「いやそれはない」

「マジレスせんでもええんとちやうん」しゅん

いやいやあからさまにシュンとしてるじゃん効果音にしゅんつて。

俺は思わず謝る。

「えっあ、いや、ごめんなさい」

「悪いいな」

「っと、ちと落ちるわ、用事あるさかい」

「またな」

「じゃあね、きばおうさん」

「また」

「あれ、、、ログアウトボタンが、、、ない」

この言葉に思わず黒い笑みを浮かべてしまう。

だって、ーーーーーそう言う仕様なのだから。

「どうしたのハチ、なんか黒いオーラが出てるよなんかもう如何にも悪役っぽい。コナンで言ったら黒い人だよ黒い人！」

「いや、全身黒い装備をしてるやつに言われたかねえよ。でも悪役についてはあってるかもな。いつも俺はヒールをかってきたからはっ。」

言つて悲しくなってきた。あれっ、いつの間にか目から汗が。

「言つて悲しくなるなら最初から言わなければいいじゃん」

「いや、最初に話ふっかけてきたやつのセリフじゃないからなそれ」

あーあ、話してる内に何故か殺意が湧いてくる。よく考えればあの奉仕部の体制は全て俺の独壇場だったわけであの馬鹿どもは何も活躍していないんだよなあ。

「悪役じゃないよオーラが、魔王だよ。勇者殺しちやダメだよ。」

「魔王は雪ノ下さんで十分だ。ってか、おまえ「キリト」キリトはそんなメタいセリフ言つていいのかよ。」

「いいのいいの、どうせ出すかもわからないような作品なんだから」

「論点がずれた、きばおうさんさっきの発言の真偽は？」

「本当だ」

一応確認するが当然だろう仕様で元々ログアウトボタンなんて設けていないのだから。GMコールしてでない時点でなんらかの可能性を考えろよ。

運営の不備なら速球に対応するはずで、この世界でバグなんてほと

んど存在しない。

そして視界が行成塞がる。
始まりの街

だが俺の見える景色は街ではなく白いベールで包まれた清楚な部屋だった。

ーよう

ー調子はどうか

ーお前は聞かなくてもわかるだろ

ーはっ、そうだったな

ーお前は这个世界を誰よりも好いているんだろうそんなことは聞かなくてもわかるし、お前のバイタル、精神状態が現実世界でのそれより良好なのは見なくてもわかるからな。

ーわかってんじやねえか。ってかそうなのか？

自分じゃワカンねえかな。そっちはどうだ。もうひとつの俺さんよ。

ーんあ？あ、悪い呆けてしまった。なんだって？

ーいや、だから調子はどうかって

ーいやいや、お前がそんなことを気にするなんて何かあったのか？

ーいやいや、俺だつて人の心配くらいするつての。どんな風に見えてんだよ。

ー中二拗らせた他人恐怖症。あつあついでに偏執狂。

ーひでえレッテルだなそりや。まあ、昔の俺だったらそうだったかもな。だが、この世界に来てからはー

ーはっ、あくまでもここにきたおかげってか？

そりやーようござんした。そろそろ時間だし行くわ。またな、もう一人の俺。

そう言つて。白いベールもとい研究室のような部屋から脱する。

最後に見えた、一室には、いくつかの脳がくるくると宙に回転している部屋があり、この場所の異常性を物語っていた。

「もうこの部屋とはお別れだな。お世話になりました。つても、長い間は使っていないし、それに対象物は人じゃないがな。」

まっ、証拠隠滅のためにログもオールデリートするから、もう永久的にサヨナラなんだが。」

悪役さながらの風格を醸し出し、意地悪い顔を浮かべながらそれでいて期待に満ちた顔で部屋を去った。

これから起こる事は、交える二人。双方は極端に真逆であり。片方は天真爛漫、天津無垢で嘘などない世界だと思いきてるような絵に描いたような善人。もう一人は、この世の中は全て嘘と欺瞞でできていると本気で考えている世界を壊しかねない、物語で語るなら絵に描いたような悪人。この二人がどのように関わってどのように終わるのかはだれも予想だにできない。

語られることのない事象なのだから。

この戯曲は悲劇ですらない

第1節 価値観の違い

ちよつと、ねえつ、ねえつてば起きて

ん、うるさいあと30年くらい

そんなに寝てたらお爺ちゃんになっちゃうよ。ヨボヨボなんだよ、顔だけは端正なんだから、そのところがちゃんと年齢に対する価値観改めないダメだよ。目は腐ってるけど。

う、うるさいつ。後少ししたら目だつて、このプログラムでも腐っている目だつて、な、治る日がきつといつか、くると思うから。

きつといつか、つて言っているあたり保証ないし第一その目がなくなつたら、、、ねえ、言わんとしてる事はわかるでしょ。

つまり、そういうことさ。

いやいや、別の世界のキャラをいきなりぶっこまないでよ。びっくりしたー、似合つてなさすぎでしょ。キラッがフヘツに聞こえるよ。シエイクスピアだつて、君は目が腐っているね。あつても事実を言ってるまでであつて悪意はない。とか言いそうだけど。

俺が一言呟くだけでこんなにも糾弾されるとは、恐れ入った。つてか、どんな風に見られてんだ俺つて。キリトのやつには、厨二拗らせているやつとか言われたが。もう神が何ちゃらとか、歴史的人物の真似事なんてしていいないぞ。ふつ、もうそんなくだらない価値観は捨てた。

うーうーん、今でも中二病患者に見えちゃうのは気のせいなのかなあ。あつ、わかった。中二病患っているやつには現実が見えてないことがままあるが、八幡はちゃんとわかってるから高二病だねつ。二階級特進だよ。よかつたじゃん。ジョブチエーンジ。テツテレー高二病患者!!

痛い、痛いよそいつつてか俺だよな。俺も自虐ネタを披露する事は多岐にわたつてあるが、雪ノ下よりも激しい侮辱には耐えられる気がしねえぞ。何だよ存在否定つて。酷すぎたる。お前、”メンタルヘルsprogramだろう?そんなことをのた回つていて大丈夫なのか?

大丈夫、大丈夫い。平気だよ八幡!!

そう言いながらくるくると回る回る。その姿は秀麗なる花嫁の華麗なダンスのように見えなくもないが、回っているだけだし、何よりあざとい。これだから天然系あざとい科は嫌なんだよなあ。曰くそいつらは、パーソナルスペースへずかずかと踏み入る。曰くそいつらは、男子を男子だと思わない。曰くそいつらは、涙目上目遣いは交渉術だと心得ている。などとある。っておい、最後の何だよ。それ絶対一色の受け売りだろ何で俺の思考領域に入ってきてるんだ？

いつでも、先輩の脳内にはいろはの姿ありっだよーせーんぱーい。うっ、頭痛くなつてくるが、この際置いておこう。置いておかないと危険な匂いするし。また告白してもないのに振られそう。でも、あいつ俺がいじめられていても周囲の空気に構わず俺と一緒にいてくれた数少ない友人の一人なんだよなあ。

そう思うと無下にはできないし、したくもない。もとより、戸塚、川崎、一色は大切な、かつ大事な友人なのだ。そんなことできるはずもない。

ん材木座?そんな奴知らん。

はっ、はちまーん

うっ、脳内で抱きついてくる。何だよわかったわかった。ってか元々お前も大事な友人の一人だよ。そんな事はお前だつてわかっていたはずだ。

そういうと、涙目だだだ、材木座はぐつと親指を立て消える。ってか、俺ゆいと話してたよな。

おーい?

ンなんでしょうか?もう行かないといけないので別れの挨拶くらいはしますが。

あつ、そうか、じゃあなまた。

またです。

そう言つて直後眼を覚ます仕草をし、さも今起きたかのように装つ

た。理由はある。それは

「あーっ!! やつと起きたねハチ。遅い遅いよ。もう少しでキスするところだったよ?」

「おっ、おい、そういうのは思っても言わないもんだろ、正直恥ずいから。」

そう言いながら、顔が急激に紅色に染まっていくのを自分でも感じているが、顔を逸らし話題を変えて紛らわせようとした。つかなんてキスしようとするの? 誰にでもするんじゃないやキス魔だよキス魔!

「つか、何でいるんだ? いや分かっていたし、だいたい理由も検討つくけどさ」

「だって、八幡寝たら起きるまでに時間かかるし、起きたら起きたで後60年とか言つてまた寝るんだもん。もう一層の事永眠しちまえてね。あつでもでも、今のは本当に思つてないから気にしないでね。分かってると思うけど。」

だから、そばいて起こし続けることで諦めさせてるんだよ。精神ごと。」

「怖い、怖い、精神ごと諦めさせるとかどんだ俺信用ないんだよ……泣くぞ、主に俺が。つてそんな事はどうでもいい、そもそも60年つて増えてないか? しかも、精神ごと起こすつてどんな起こし方だよ、母親だつてそんな起こし方せず。一言だけ言つてもう起こしてくんないよ?」

「あれ? 60年じゃなかったっけ? あとあと、母親だつてもう少し起こすと思うよ? それは八幡の親だからじゃないかな?」

それを聞いたとき直後に、思案した。愛されてないんだなあ、俺つて。あつ、でも一言声かけてくれるつて事は慈悲はあるつてだけでもマシンかな。

だつて、愛情は小町に注がれるんだからしようがないじゃん。

「そんなことよりも、もういくぞ、一分一秒無駄にできないからなここは。」

所変わってーーー

うまくやっているみたいだね君は。君はいつも謙虚だがやるとき

はやるみたいだ。少々人間関係に難があるみたいだが、そこを取り除けばすごい人でしかないよ。将来が期待できる。僕と違ってね。

しかし、君の周囲の人間はろくでもない人間ばかりだったみたいだね。少しばかり同情するよこれは。

君が聞いたら絶対に嫌がるだろうから言わないけれど。居るんだよ、この世界にも何人か君の見知った人間達が。

だから、応援しているよ。ハチくん

e p i l o g u e a n d 第1話 e n d

トールバーナ第一層攻略だど?!

ふうー

疲れたー小町助けてーあつここ現実じゃないんだっけ? 余り現実と相違ないから気づかなかつた。そんなことより……………

出てこい!! 俺のマツカン!!

マックスコーヒーと言う名の糖分の塊を一気に飲み干す。

そういや前に、キリトのやつに進めた時……………

「ん? なんかシンプルな配色の缶だね! 美味しいのそれ?」

「おうー! 千葉県民はみんな飲んでる。元気出るぞー。この暗い世の中ではな……………」

「もう! そうやっていつも悲観的になる! ダメだよ。ダメダメ。そんなんじやいつまで経っても腐ったままだよ? 主に目が!」

「ううっ、このダークマターが疼く……………」

「うん、厨二だね!」

「……………やめてー暗い過去が蘇るうー!」

「まあ、いいから飲んでみるね。見た所普通のコーヒーみたいだけど……………」

そうやって、缶コーヒーを開ける。ぱかつ。

「ぐくっ、ぐくっぐく」

あああー一気に飲み干しちゃったよこの子。やつちやつたーやつちやつたー。それにしても、なんかエロい。いや、飲み干す仕草が。こいつ子供っぽいのにそう言う所ちよつと大人っぽくなるんだよなあ。不思議。そしてごちそうさま!

「うっ、ううううう」

「ご判定は……………」

「甘苦しいわ!!!」

「とても甘いと言うことで、星つけるなら……………」

「星」

ってなつたんだよなあ。なんでこのくらいの甘さがちょうどいい

じゃん。そうだコーヒーは苦いと言う価値観が間違っているんだ。そうだ俺は悪くない。コーヒーが苦いと言うのが間違っているんだ。俺は広めたい！このマックスコーヒーと言う神なる飲み物を………またキリトに厨二とか言われそう。

厨二は材木座だけで事足りてるっての。」

YUIいー

はい なんてでしょうか？びきびき

ーん？なんかびきびき言ってるけど大丈夫？

大丈夫かどうかと言われますと、大丈夫ですが。あなたは少し感情というものを知った方がいいですね。たとえば、怒りとか怒りとか怒りとか怒りとかあと怒り!!!

ーあつ、(相当怒ってる。なんで？俺なんかした。ずっと仕事してたしよくわからんけど。たまに女ってよくわからんところで怒るよな。例えば「(以下略)」以下略するなー!!なんで、なんでもっと自分で語りさせてー!!」

なんか頭悪そうな言葉喋ってますけど大丈夫ですか？近所迷惑になる上キリトさんが見たら厨二って笑われますよ。ぷつくく

ー………お前もすでに笑ってんじゃねえか。キリトが笑う前にお前が笑ってるじゃねえかー!!

ぷつ、すみません。ついつい、笑ってしまいました。じゃあこれでおあいこって事で。

ーん？何がおあいこなんだ?????

それよりも!!もう時間なのでバイバイです

ーあつもうそんな時間か！おっけーまたな。

じゃ、「キリト」によるしく!!

ん？あいつキリトって呼ぶっけ？いつもキリトさんとかいってなかったか？まあ、何かあったのかもな。気持ち的に。

…八幡がその意味に気づくのはだいぶ先になりそうだ。

「馬鹿言う相手いないつうの。」

「違う違うキリ坊に言うなっついていってんノ。あいつに言うとなんかたぐるしい喋り方だと疲れるでしょ。ちゃんと素で喋ろうね（ナイフ。とか言っつて脅してくる事請け合いだよ。」

「そうだよなあ、キリトっついていかにもゲーマーって感じだから、なんでも剣で語り合おう的な展開になるよな。そのフルーツは剣で勝った方が貰う!!みたいなっ。」

ともあれ、本当にキリトの性格はゲーマーって感じで、女の子には似つかわしくない。うむ。なぜキリトは女なのに戸塚は男なんダー!!!

「はー坊今なんかすごい頭の悪そうなのそれでいて、性変換シローみたいな波動を感じたのだが」 睨み目

「何その波動??? まあ、ともあれ……………そろそろ行かないと時間まずくない??」 ??

そう今日は

「あつ、そうだったナ。それじゃ、行くゾ。」

トールバーナへ」

初会議の日だ。

「あーっ! きたきた。おーいこつちこつち」

元気よくキリトが言う。つてか、はしやぎすぎじゃね。あのおつきんとかめつちや睨んでんぞ。ほら、あの隅にいるやつとか「目は腐ってるのに、目は腐ってるのになんで私より……………」とか言ってるよ。怖っ。やめて、ぼつちは視線に弱い。だからここは…………

「よーし、ここらで聞いているか」

「ソダナ。つてか、私帰っていいカ?」

心底帰りたいそうに言うがなんで? 君が帰ったらほんと心細いんだけど。それに、もつと大切なこともある。例えば、ベータテスターへの糾弾の時に庇うためのカードとかな。

「はーい。ちゃんと聞いてようなー」

「子供扱いするナ。おねーさんは君よりも年上だゾ♡」

「あんまり、年上に見えないからなーそれ。」

アルゴはクネクネしてる。いや、ほんとクネクネしてしなをつくつている。地味にエロい。あつ、てか……………

「ちよつと」(*、ω、)

そう、忘れてた。キリトの奴いたんだった。

「二人だけいい雰囲気になってずるいずるい」

「ん？既にハー坊とは、お・と・な・の関係だゾ♡」

「え…………じゃあまさかあんなことやそんなことも」

「しちやつてたり♡」

「ま…………まさか…………ハチ？」

「いや、違うからな。こいつがお前をからかいたいだけだからな。」

「なーんだよかった」εー(∇、；)

「おねーさんは何時でも本気だゾ♡」

「ややこしいこと言うなっ」

そう言いながら頭をグリグリする。グリグリグリグリグリ

「痛いっ。痛いぞハー坊。そこらへんで……………だから痛い。もう

しないから…………やめて」(T・T)

畜生。なみだめ上目遣いでそう言われるとなんかグツとくるものが…………そういえば、会議に来てたんだった。やべー。

ソコチャントキイテルカー

「はい」

なんか喋ってるので聞くとするか。アインクラッドで初の会議。そして、2ヶ月もだつてようやくの第一層攻略。絶対荒れるぞこの会議。

「はーい。それじゃあ始めようか。俺はディアベル。職業は気持ち的にはナイトやつてる。」

気持ち的にはって…………じゃあ俺はシャドウアサシンとかか？目腐ってるし。敵の背後からとどめ刺すタイプだし。人から見つけられないし…………なんか言つて悲しくなってきた(∇、∇)

ジョブシステムナンテナイダロー

ワツハハハ

アノメガクサツテルヒトガ……

っ?!最後の何???

「さておいて、先日俺たちのパーティがこの階層の最上階へ続く道を発見した。つまり明日か明後日にはボス部屋に辿り着くって事だ。」

周囲が少しぎわめく。俺も遅いと思ってたけどようやくか。マツピングってやっぱり難しんだな。うん、八幡やったことないからわかんない。キモいしやめよ……

「ここまで一か月かかったけど、俺たちは示さなきゃならない。ボスを倒し、このゲームはクリア可能だということを、はじまりの街で待つみんなに伝えなきゃならないんだ!そうだろみんな!」

そして再びぎわめきそして拍手が起こった。ってか……材木座に声似すぎじゃね???イケメンでそれで協調性もあって……材木座いらなくね(笑)

むう はちまーん(〃〃)

だからー脳内に出てくるなつてのー!!ゴメン!ごめんから離れてー!!

そして、周囲が盛り上がりつつ中低い声が流れた。

「ちよお、待ってんか、ナイトはん」

ん?んん??んんん?あれってー

そうして広場に広場の中央に現れたのはー最初レクチャーした男“キバオウ”だった。

でたーモヤツとボール!!!不謹慎だな。本人の前で言うのやめよ……

「わいはキバオウってもんや!ボス戦前にこいつだけは言わしてもらおうで!」

ディアベル「こいつっていうのは何かな?」

キバオウ「こん中に五人か十人、今まで死んでった二千人にワビ入れなあかん奴がおるはずや」

ディアベル「・・・キバオウさん。君の言う『奴』ってのは、元β
テスターの人たちのことかな？」

キバオウ「決まっとるやろ。β上がりどもは、こんクソゲームが始
まったとたん、ダツシユではじまりの街から消えよった。大勢のビギ
ナーを見捨てて、な。奴らはうまい狩場やらボロいクエストを独り占
めして、ジブンらだけぼんぼん強うなってその後もずっと知らんぷり
や」

ニュービーと元βテスターの間で溝ができていくことは知ってい
たが、こいつもβテスターを嫌うやつの一人か。こりゃあ、めんどく
さいことになりそうだな。

キバオウ「そいつらに土下座さして、貯め込んだアイテムや金を吐
き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし、預
かれへん、わいはそう言っとるんや！」

分かってないみたいだな。ベータテスターの有用性と、いかにベ
ータテスターが攻略の鍵を握っているかが。そもそも、これは一人で
やっていくゲームじゃないんだ。俺だってそんなくらいのは分か
る。その中で唯一無二の存在であるベータテスターが情報を持って
いることだってある。それに経験者なんだから素人よりは強い。単
純な事だ。

まあ、否定的になってもしょうがない。手札もあるしな。どう使お
うか……………

「……………」

キリトが下を見て俯いている。やっぱりベータテスターだからつ
て非難されるのは辛いよな。俺もそういう事が……………あり過ぎて
……………

よしまずは手札の確認。

1. まず初めにキバオウ本人を俺たちがレクチャーしている
2. 2000人の全ての人間が、初心者ではなく80%の人間が
ベータスターであり、最初のナーヴギアを無理やり頭から外した等
で死亡した人数を数えるとそう多くない。

3. ベータテスターたちの情報を集めてハンドブックを書いてい
る。

4. ベータテスター達は初期ロットなので1000人しかいない
はずである。

うーん。これだけの情報があれば余裕だし、騒ぎにしてことを大き
くしたくもないので、温く行くか。

「キバオウさんよ……」

「なんじゃわれ!!」

キバオウは怒ってそう言うが、構わない。全員に視線を向け、俺は
被っていたフードを脱ぎ捨てる。かつくいー俺!!

「俺の顔覚えてないかい?」

覚えているはずだ。何せ、こんな腐った目。そうそうあるもん
じゃ無いからな。言つて泣きそうだけれども。

「お、お主は……誰だっけ?」

「おおおーい!!!」

瞬時に空気が柔らかくなり、笑いが広がる。

プツクク

アイツカツコツケタノー

メハクサツテルノニ

だから最後のなんだよ。

「ま、まあ覚えてないにしても此奴は覚えているはずだぜ。お前も覚
えてるだろキリト」

「うん……覚えているはずだよ。キバオウさん」

「あつ、お主は最初にレクチャーして貰った……キリトとハチか!!!」

「そうだよ。で、ものは相談なんだが……ちよつときて」

「ん? なんや??」

周囲に聞こえないようコソコソ声で話す。これは聞かれたらまず
いからな。

「で、キバオウさんよ。俺も一応ベータテスターなんだが」こそこそ

「それじゃ話にならないだろ!!」

「落ち着いて落ち着いて。で、相談なんだが、今村で配っているハンド

ブックあれには第一層までの情報しかまだ書いていないだろ?」こそこそ

「まあ、そりやそうだろうな。なんせまだ1層をクリアできていないもんな。」

「そこなんだが、俺の情報網には、25層までの情報がある。そして、その情報は未だ俺しか知らない」

「な!?信じれるかそんな話」

「キリトとアルゴに聞いてみるか?その時点でアイツらにバレるから交渉決裂だけど……それにキバちゃんの言ってる話だとベータテスターのせいで死んだってなってるけど、違うんだよ」

「は???」

「ベータテスターは確かに始まりの街からすぐに出て効率のいい狩場に行つてその場所を独占したかもしれない」

「だが、死亡数の比率はベータテスターの方が圧倒的に多い。」

「な、なんやと?!それでも、わいの仲間達は始まりの街で……会う前に……死んだんや」(〽〽)

「そうかもしれない。ベータテスター達が皆をレクチャーしていたらそうならなかったかもしれない。だが、現実は残酷だ。」

「そもそも話ベータテスター達は何人かしているか?」

「そ、それは、こんなかに20人いれば少ない方じゃないのか?」

「ちがう。そうじゃないんだよ。こん中には10人程度しかいない。いや10いたら多い方か。」

事の次第に気づいたで、ギバちゃんは啞然とするような顔を見せる。

「じゃ、じゃあわれは………」

「そう、なんてことしてんだってな。だけどまだ取り返しがつく。コルは払えないけど、俺がベータテスター分のコルを払ったって事にして、仲間達には次いでにこの先のハンドブックも奪って置いたってことにしとけ」

「あ、ありがとう(〽〽)お主がこんなに優しいやつだったとはな。でもそれだとお主が悪者つてことにならないか?」

「俺は優しくなんてねえよ。周囲が冷たいだけだ。あと俺が悪者にされるのは慣れてるからどうって事ない。じゃまた何かあったら。」

「おう、また何かあったら頼らせてもらうよ」

手を振りながら去っていくキバオウを見ながら。俺も変わったなと独りごちる。

そう、昔だったら正論を言い並べて、それこそ雪ノ下のように、そして俺の卑屈な言い方を混じえて言い負かしていただろう。だから、俺は変わった。この短期間で変わってしまったのだろう。

こんなんじや、明彦さんに顔向け出来ないな。

「彼奴のお陰で目が覚めたわい。みんな命がけなのに我はベータテストに死ぬと言うとるようなもんやからな。ごめん。皆!!」

イイヨ

キニスルナー

メガクサツテルノニイ

だから最後の何なんだよ
?!?!?!
怖い怖い。

「キバオウさんも心変わりしてくれたみたいで良かったよ。じゃ皆6人ずつでレイドを組んで!!」

や、やばい。ぼっちの俺には誘う相手なんて………いたわ。キリトいたわ。ほんと忘れてた。

「むう。ハチ!!きつきから私全く喋って無いどころかこの話始まって挨拶くらいしかしてないよ」(ム?)

「ごめんごめん。てかメタイから。それは、話作るのが下手な作者に言って!!俺じやどうしようもないから!!」

ほんとだよ。この話始まって以降俺の視点しかないよ。ずっと、喋り続けてるんだよ俺!勘弁して!

「まあ、それはさておき。パーティ組むよね?はち?」

「いや、俺はその日あれがあれでして……「組むよね」ちよつと用件が「組むよね?」

………はい。」

無力だなあ俺って。

「それにしても、嬉しかったよ。ハチがキバオウさんを説得してくれて。嬉しかった。だから、ありがとう」

「お、おう」

不意に寄りかかって来るので驚いたが、しばらくこうしてよう。此奴と寄りかかっていると何故か安心する。体が熱くなる様な、それでいて少し儂いような。大切な奴だ。絶対にこの手で守り通す。例え裏切られるようなことがあれど。

「あつ。あの人もハブれてるよ！ハチ誘ってきて！」

「俺かよ!?俺だぜ俺、コミュニケーション能力皆無の俺だぜ?その俺に任せるってのか?」

「そうだけど……じゃこれも勉強だね。行ってきたー」

「勉強で片付けちゃったよ。はあ、しゃあねえ行ってくると思いますか。」

立ち上がりハブれていてそれでいて……さっきから腐った目を連呼してくるあのはぶれをちよつと誘ってくるか(怒)

「おい、そののフード」

「何?」

「ちよい、ツラ貸せや」

「強盗なら帰って。金目のものなんて何も持っていないわ」

「違う違う。俺とパーティー組まねえか?ってことだよ」

「ヤンキーみたいな目をした人と組むパーティーなんてないわ。帰って頂戴。」

「んだとごらあ(怒)ヤンキーみたいな目って、もうちよつとつめよ」
「あら、そう?じゃあしようがないわね。深海魚みたいな目をした人が私になんの用?」

「包んでないよ!!ずっと酷くなってるよ!」

「ふふっ。包めるものが無さそうだから。つい。」

なんだか、こいつと話しているとユキノシタを思い出すな。まあ、あいつとは性格も風貌も全く違う所か、多分性別も違う。

「まあ、いいや。あぶれてんだろ?お前も」

「あぶえてなんかない。周囲がみんな組む流れになったから自然と1人になっただけ。」

「ふっ、それを人はぼっちと呼ぶ」

「あなたと一緒にしないで。なんか厨二病って言われそう。」

「やめて、初めて会った人に厨二呼ばわりされたの初めてだよ。」

「自覚があるの自覚が無いよりいい事だよね」

「俺は厨二じゃないぞ」

「自覚があるのは自覚がないよりいい事だなんて思ったら大間違いだよー」

「なんかさつきより酷くなってる?!」

俺は厨二じゃねえ!!え?違うよね??キリトにもそう言われてるけど。俺、材木座と一緒にされるのは嫌だよ(〸〸)

「何故か、あなたと話していると気が休まるわ。」

「そうかい、じゃパーティー組むぜ」

ウインドウを開きパーティー申請を送る。んっ??こいつアスナってのか?見間違えか?

違う、やっぱりアスナだ。いや、あのアスナじゃないだろう。あれから時間もたってるし顔も変わっているはずだ。何せあのアスナだったら合わせる顔がない。

「アスナってのか。よろしくな。あとあいつもパーティーだから挨拶くらいしとけよ」

「あまり、宜しくする気は無いけど、よろしく。挨拶くらいするわ。それと……なんで私の名前を?もしかしてストーカー?」

「違う違う。ほら上に見えるだろ。そこに名前が書いてある。」

アスナは上をむく仕草をする。ほんとに見えてんのかなあ。そのフード被って。

「ああ、あなたははちつて言うのね。じゃあ、あの子にも挨拶してくるわ。」

「じゃあ、俺はちと眠いから。風呂入って寝る。キリトにもそう伝えといてくれ。」

「今、なんていった?」

「ん？だからキリトにも伝えといてくれて」

「じゃなくてその前。」

何なんだ？はちまんよく分からないよ。

「風呂入って寝る？」

「そうそれ!!お風呂あるの？」

「俺のうちは特別性だからな。他の宿にもあるところはあと思うけ

……「行かせて。君の家に」………」

うん。何を言ってるのかな!?勢いで喋ったんだと思うけど。何を言ってるんだ此奴は。まあいいけど。友達んち泊まる感覚でおけーですよ。友達居ないけど(´TωT`)

兎にも角にも俺のSaoは絶対間違っている!!!